### **◉ フェーズ①：要件整理・共通課題の抽出**

このフェーズでは、参加各社の生成AIリテラシーを向上させるとともに、共通および個別の業務課題を明確化し、後のカスタムAI開発の基礎を築きます。

#### **1. 勉強会の定期開催（1～2回／月）**

* **目的**: 各社の生成AIリテラシー向上を目的とします。
* **内容**: 座学とワークショップ形式で実施されます。
* **具体例**: 生成AIの具体的な機能や活用事例を提示し、参加者が「自社の業務でどう使えるか」を検討する機会を提供します。
* **実績**: **すでに2025年5月には、白巻、女川、気仙沼地域で20社以上が参加した勉強会を実施済みです**。

#### **2. オンラインサポート体制の構築（LINE想定）**

* **提供者**: 専門家がサポートを担います。
* **内容**: 日常的に「活用ティップス」が共有されます。
* **質疑応答**: 各社からの質問は随時受け付けられ、それを通じて学びとナレッジが蓄積されます。
* **役割**: 勉強会の“間”を補完し、生成AIに関するインプットと理解の速度を加速させることを目指します。

#### **3. 各社ヒアリングによる個別課題の抽出**

* **実施者**: 専門家が現場業務の詳細ヒアリングを実施します（訪問含む）。
* **目的**: ヒアリングを通じて「AIで解決可能な構造的課題」を明確化します。
* **共有**: 明確化された課題は、勉強会でも共有されます。
* **ナレッジ化**: これらの課題や解決策は、地域業界全体のナレッジとして蓄積され、広く展開されることを目指します。

#### **具体性について**

上記の記述は、事業計画書に盛り込む情報としては十分な骨格と具体的な活動内容を示しています。しかし、さらに具体性を高めるためには、以下の点について検討・追記が可能です。

* **勉強会のコンテンツ具体例**:
  + 「生成AIの具体的な機能・活用事例」について、例えば「ChatGPTを用いた日報自動作成のデモンストレーション」「画像認識AIによる検品補助のシミュレーション」など、水産加工業の文脈に即した具体的なテーマ例を挙げると、よりイメージが湧きやすくなります。
  + ワークショップで具体的にどのような課題設定を行い、どのようなアウトプットを目指すのかを記述することも考えられます。
* **オンラインサポートの運用詳細**:
  + 「活用ティップス」の具体的な内容（例：プロンプト作成のコツ、最新AIツールの紹介など）。
  + 質問対応の担当者や応答時間、ナレッジ蓄積の具体的な仕組み（例：FAQデータベースの構築、成功事例の定期的な共有）について言及することで、運用体制の具体性が増します。
* **ヒアリングで抽出される課題の分類と活用**:
  + 抽出された課題を、例えば「定型業務の自動化」「データ分析・可視化」「予測・最適化」といったカテゴリに分類し、それがフェーズ②のプロダクト開発にどのように繋がるのかの全体像を示すと、より戦略的な記述になります。
  + 「専門家」がどのような分野の専門性を持つのか（例：AIエンジニア、業務改善コンサルタント、水産加工業の業務知識を持つITコンサルタントなど）を明記することも、プロジェクトの信頼性を高める上で有効です。

これらの要素は、事業計画書の詳細度に応じて加筆を検討してください。

### **◉ フェーズ②：カスタムAIの開発・実装**

本フェーズでは、フェーズ①で明確化された共通および個別の業務課題に基づき、具体的なカスタムAIツールの開発、導入、そして継続的な改善を行います。

#### **1. 共通課題に基づくAIツールの企画・設計**

* **要件整理の集約**: フェーズ①で実施した勉強会、オンラインサポート、および各社ヒアリングによって抽出された**共通課題**を詳細に分析します。これにより、水産加工業特有のニーズと、生成AIによって解決が期待できる具体的な業務プロセスを特定します。
* **複数社共用ツールの設計**: 特定された共通課題をもとに、**複数社が共同で利用できるAIツール**の企画・設計を行います。これは、個社での開発負担を軽減し、業界全体でのDX推進を加速させることを目的としています。例えば、定型的な問い合わせ対応や帳票作成、受発注業務の初期処理など、多くの企業で共通して発生する業務の自動化・効率化を目指します。
* **専門家の知見活用**: AI開発に関する専門家（例：一般社団法人フィッシャーマン・ジャパンからの生成AI専門家派遣）が、技術的な実現可能性と業務への適合性を考慮した上で、具体的な機能要件やシステム構成の設計を支援します。

#### **2. 生成AIプロダクトの開発**

* **技術選定と開発**: 企画・設計されたAIツールは、**ChatGPT　GPTs、 APIなどを活用**し、具体的な業務改善アプリとして開発されます。これにより、自然言語処理能力を活かした多様な業務支援が可能になります。
* **カスタムAIの具体例**: 開発されるカスタムAIプロダクトの具体例としては、以下のようなものが想定されます:
  + **受発注業務を支援する画像認識・情報整理AI**。
  + **製造現場の日報・帳票の自動作成を支援する文書生成AI**。
  + **議事録自動生成、営業文書・補助金申請書類作成を支援するAI**。
  + **事業計画や報告資料の構成整理・文章構築を補助するカスタムAI**。
  + **社内ナレッジの蓄積・活用を促進するQA型ナレッジ整理AI**。
  + **その他各社の細かな日常業務を支援するタスク分担型AI**（例：問い合わせの自動仕分け、社内文書の分類・転送など）。
* **開発費**: プロダクト開発にかかる費用（エンジニア費用、API利用料など）は、補助金の使途として想定されています。これは宮城県中小企業等共同化チャレンジ事業補助金の対象経費（コンサルタント経費や設備費、その他知事が認める費用）に該当すると考えられます。

#### **3. 実装・運用とフィードバックサイクルの構築**

* **各社での実装・運用**: 開発されたカスタムAIツールは、共同事業体の各構成企業（株式会社八葉水産、株式会社マルカ高橋水産、株式会社布施商店、株式会社センシン食品など）において、**実際の業務で実装・運用**されます。
* **フィードバックと改善**: ツールが現場で利用される中で、**フィードバックを通じて継続的な改善サイクルを構築**します。これにより、ツールの実用性と効果を最大化し、現場のニーズに合わせて柔軟に機能を調整・拡張していくことが可能になります。このサイクルを通じて、業界全体で共有可能な生成AI活用ナレッジが蓄積されます。

本フェーズを通じて、各社の生成AIリテラシー向上に加え、実際に業務課題を解決するカスタムAIプロダクトが複数開発され、業務効率化と生産性向上が図られることが期待されます。